3 障害児へ行った床による口腔機能訓練法の経験

○緒方克也
福岡市　緒方小児歯科医院

カスティロ＝モラレスによって考案されたプレートによる口腔顔面協調訓練法は、小児科医のリムブロックによって障害者歯科の領域にも紹介された。この方法は、口腔内のプレートに備えられた突起物を、患者の舌や口唇が触れることで随意運動や感覚認知が誘発されるとされている。C．モラリスや　J．リムブロックらは、この訓練で舌や口唇は適度な緊張とリラックスが得られ、機能的な運動を学習するために効果的と述べている。

口腔内に装着したプレートが舌や口唇へ刺激を与え、その結果それらの機能が獲得されるとする根拠を、考案者はさまざまな角度から検討しているが、プレートは舌や口唇が学習するための玩具といった考え方を述べている。すなわち、プレート上の装置には、患者の発達にあわせた刺激物が設計され、指や手で玩具を扱うように舌や口唇を用いて刺激物に触れる。そして舌は刺激物の形態、大きさ、動きを知り、さらに舌先で認知しようと働く。

演者はこのプレートを用いてダウン症児と脳性麻痺児の口腔機能訓練を行った。その結果遅滞していた機能に、何らかの改善をみた症例を多くみたので、その概要について報告する。

4 口唇の捕食機能と咬合の関係

○毛利元治、石橋美佳

もうり小児歯科（福岡市）

摂食機能は、離乳期の学習を通じて獲得され、その第一歩は上唇を下げて口唇を閉鎖する捕食動作の獲得にあり、次いで成熟嚥下、咀嚼能力を身に付け１～３才で完成される。

最近、異常嚥下癖などの口腔習癖に対して咬合誘導的な発想から、筋機能訓練法が応用される機会が多くなったが、その対象が患者自身の理解と積極的な練習意欲を獲得できる症例に限られるために、年令や適用範囲に限界がある。また、嚥下や咀嚼は外部から直視できないために、保護者も異常嚥下癖を気づかないままに経過している場合が多い。

演者らは、嚥下機能獲得の前提条件になる口唇の捕食機能に焦点を当て、保護者自身の目で患児の摂食能力の発達レベルを確認でき、意識を高める指導方法として、スプーンから麦茶を口腔に取り込む捕食動作の診査（以後、スプーン診査と略す）を用いている。第７回本学会では、スプーン診査を用いて、多くの小児が離乳初期に獲得する口唇機能に問題を持つことを報告した。また、アンケートから、スプーンの使いなど離乳食の与え方について、保護者が指導された情報に不足があり、援助が必要であることも確認した。

今回は、乳歯列の咬合形態と口唇機能の関係を分析したので報告する。分析の対象は初診患者のうち、第１乳臼歯の咬合が完成した乳歯列を持つ１才～５才児の資料を用いた。

咬合診査は、患児を仰臥位に寝かせ、視診と触診のみで評価した。診査内容は、上下歯列弓の形態、上下顎の被蓋関係、および咬頭嵌合位における安定度（咬合の安定度と略す）の３項目である。